継続架工義歯に機能コアを応用した症例

腰 原 好* 太 田 是 男 潤 田 和 好

Clinical Reports of a Functional Core practiced to the Crown and Bridge Works

Yoshimi Koshihara, Yoshio Ohta, and Kazuyoshi Uruta

緒 言

歯科補綴や局部義歯の場合に、多くの症例が上下顎咬合する残存歯列を有するので補綴する人工歯の咬合面は、残存歯列の咬合面や顎路によつて規制される顎運動に調和したものでなければならない。特に陶材の利用度の高い今日、その応用にあたり人工歯に強度を得る目的で、陶歯前装法や焼付ポーセレンのように金属による裏装をおこなう方法が多くところみられている。その場合に金属の厚みが重要な要素となり、もしこれを誤ると陶歯の破損や支持組織の破壊をきたすことになる(図1)。これ等不快事項を防止し、しかも義歯の機能を満足させるには、どうしても義歯調製過程において顎運動、特に咬合滑走運動を記録し、それをガイドにする必要がある。その手段として従来より種々な方法が用いられている。残存歯咬合面の傾斜が平均値に近い症例にあつて

図 1 前装陶歯の破損

は、簡単な平均値咬合器によつてもほぼ近似的な運動路が得られるが、その適応性を判断するのが困難なのが現状である。大部分の症例においては、咬合面が種々の傾

斜を有していることが多くまた運動も多様であり、その運動路を追跡するには、かなり精巧な調節性の高い咬合器と技術によらなければならない。あるいはこの目的のために作られた Hanau 社の Twin stage occludor とか、Jelenko 社の Verticulator を使用するが、これに類する構造をもつた咬合器または自由運動咬合器を使用しなければならない。

このような調節性または特殊な咬合器を用いずして、比較的簡単に機能時の滑走運動を記録し再現する方法を試みて好結果を得た。この術式を上顎前歯架工義歯と上顎臼歯に陶歯前装の鑄造冠に応用したので報告する。

咬 合 器 付 着

通法にしたがつてラバーで精密印象を行ない、超硬石膏をもつて支台歯とそれを含む歯列を調整した上顎模型と、解剖的な下顎歯列模型とを中心咬合位が正確に得られるような咬合器に中心咬合位で付着する。

滑走運動路の記録

上顎臼歯補綴の症例においては、バイト・ワックスを2枚にかさね側方滑運動距離である約3mmの厚さにし支台歯とその両隣に歯を含む咬合面および頬面を被覆してこれを圧接し適合をはかる。咬合面のワックスを軟化し、静かに中心位に咬合させた後、下顎を側方に滑走させる。この時バイト・ワックスの余剰部が、頬側に圧流されるため指頭で頬側よりワックスを固定し歯列との位置関係を確保する。この操作を数回くりかえし中心咬合位および側方の機能咬合位をバイト・ワックスに印記する(図2)。

上顎前歯の場合は運動路をソフト・ワックスで印記すると同時にソフト・ワックスの変形を防ぐ目的と人工歯唇面の位置や正中線ならびに切端の位置を印記するため唇側にパラフィン・ワックスで堤をつくる(図3)。

* Dept. of Prosthetic Dentistry, Tokyo Dental College (Director: Prof. M. Haga)

東京歯科大学補綴学教室(指導:羽賀通夫教授)

滑走運動路の記録

図 2 上顎臼歯補綴

図 3 上顎前歯運動路の記録

図 4-1 臼歯部の機能コア

頬 面

咬 合 面

図 4-2 臼歯部の機能コア

図 4-3 前歯部の機能コア

臼 歯

前 歯

図 5-1 コアと人工歯

唇 面

側 面

図 5-2 コアへ人工歯を適合したところ

図 6-1 義 歯 装 着 前

図 6-2 義 歯 装 着 後

図 6-3 臼 歯 の 適 合

機能コアの調製

運動路を記録したバイト・ワックスを上顎歯列模型に適合させ上下顎歯列模型を 中心位に 咬合させる。 バイト・ワックスに印記された滑走面と下顎歯列模型の頬面（上顎前歯の症例では唇面）との間に楔状の凹窩ができる。 この部に石膏を注ぎ機能コアをつくる（図 4）。

陶歯冠の調製

機能コアを下顎歯列模型に固定することにより必要とする裏装金属の厚みを考慮した陶歯の形態を容易に形成することができる（図 5）。 以下通法にしたがって義歯を完成する（図 6）。

参 考 文 献

- 1) Meyer, F. S. : The Generated Path Technic in Reconstruction Dentistry, Part 1 and 2 ; J. Pros. Den., 9 : 354-366, 432-440 (May), 1959.
- 2) Panky, L. D. and Mann, A. W. : Oral Rehabilitation, Part 1, 2 ; J. Pros. Den., 10 : 135-162 (Jan). 1960.
- 3) 関根弘 : 間接法の問題点(その 1), 歯科時報, 19, 7, 20(7月), 1965.
- 4) 関根弘 : 間接法の問題点(その 2), 歯科時報, 19, 9, 36(9月), 1965.
- 5) 山田早苗訳 : クラウン・ブリッジの製作法, p. 112-122, 東京, 1966.